



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

「三人の聖者 ラマナ・マハルシ①」

「ルリ子ちゃん！」

湯船の中で思わず叫んでしまった。

あわてて口をつぐんだ。愚妻に聞かれたら、えらいことになる。愚妻の名前ではないからである。

ルリ子ちゃんは大学時代のクラスメイトである。彼女との関係についてエッセイ「Bと大魔王の恐るべき関係」に書いたことがあるので紹介しておく。

忘れもしない、大魔王の若きころ、クラブの合宿で神津島に行った。海辺のキャンプ・ファイヤーで、大魔王はルリ子ちゃんに散歩しようと声をかけた。

「いいわよ」とルリ子ちゃん。

(そろそろ、手でもつなごうか……)

ふと、ルリ子ちゃんの右側をみると、なんとBがいるではないか。

「おまえ、何してンだよ！」

「ぼくも～散歩しようと思って」とB。

あああ・あ・あ……おまえ何考えてンだよ (涙)

どういうわけか、三人で手をつないで海辺の散歩。

「お手手つないで、野道をゆ～け～ば……」と、大魔王の初恋はおわった。

Bはクラスメイトではない。二人とも勉強しないので補習講義や追試を受けに行くと、なぜかBがいた。「腐れ縁」というわけだ。

クラブの同窓会では、Bを貶める笑いのネタとしてしばしば話題にあがる。あの“初恋”はネタである。彼女に恋愛感情はなかった。ただ単に散歩にさそっただけのことである。

なのに、どうしてわが輩は「ルリ子ちゃん！」と叫んでしまったのであろうか。

友人から彼女の悲報を聞いたからである。ルリ子ちゃんとは卒業式以来一度も会ったことがない。殆ど思い出すこともなかった。

ところが、彼女の鮮明な像が浮かび上がってきたのである。

追試を受けに行ったら、前の席にルリ子ちゃんがいた。

「ルリ子ちゃん、お願い、答えを教えて」

カンニングだ。お蔭様で落第は間逃れた。Bも受ける予定だったが、放棄して留年してしまった。

その時の教室の風景、カンニング状況をリアルに思い出した。

ルリ子ちゃんは卒業式に袴姿で臨んだ。部室の前で彼女に会った。

「大魔王く～ん、見て」

わりとそっけなく「似合うよ」と言った記憶がある。

もっと、褒めてあげればよかったと後悔の念も湧いてきた。

卒業式コンパで記念写真を撮ったとき、偶然にも彼女が隣に座った。しっかりと肩を抱いたときの肌の感触がありありと蘇った。

これらすべてがクオリア（感覚の質感、現象的な意識）だ。

そろそろ読者諸氏も、飽き飽きして「あんたの与太話はもう結構」だろう。いったい沈黙の聖者ラマナ・マハルシとどのような関係があるの？と訝るであろう。

実は来月にラマナ・アシュラム（修道場）に行く。京大の若き研究者を中心に、世俗レベルをベースに哲学的探求に時間を費やすのである。

そこで、なぜわが輩が「ルリ子ちゃん！」と叫んでしまったのか、が解明されるであろう。結果は次号ということになる。

恐れることあり。わが臨終のときに、愛妻に「ルリ子ちゃん！」と叫んでしまったらどうしようか。読者諸氏よ。